

月夜の雨

自由という煙が半月の前をたなびく

かつて言語とは体験だった
今はもはや記号と化し
どの口から発せられても
その定義やイメージは同一だ

朗読によって、すなわち
声によって色付けされた言葉は
まるで厚化粧した無機的な顔のようで
朗読者の声高な叫びは、絶望的でさえある

闇が放射する

自由が多様化を産み出す、同時に
目の色変えて同調を探し回る
なぜだろう、逃走をさえ産み出すのは
おお、自由、自由とは何か

どのようでも在り得る、ということ
そのことが不安という植物の肥料となるとは
エントロピーが拡散を生むと同時に
冷却と凝集を生むように？

半月は見えない・・・
静かに雨が降り出す

(2003.10.4)